

大阪道修町における薬種扱いの変遷(2) —薬種業者から化学・医薬品関連商社
および医療・理科学機器扱い会社へ—

○宮崎 啓一¹, 多胡 彰郎²(¹三栄化工, ²長岡実業)

【目的】先に宮崎らは明治期以降の「くすりのまち」大阪(または大坂)道修町において、薬種から試薬および香料の取扱いに転じた薬業家に関して報告した^{1,2)}。今回、かつて薬種の取扱いに端を発する企業家の集まりであった大阪道修町の薬種業者から医薬・化学品関連および医療・理科学機器扱いへと転じた薬業家について、調査・検討を加えたので、その結果を報告する。

【方法】既存資料の再検討および実地踏査等による資料の収集・確認によった。

【結果および考察】薬種の取扱いに端を発した薬業家を中心に発展したかつての道修町の薬業の第一のターニングポイントとしては、次の2点が考えられる。①明治期の薬事制度の整備と医制発布等による洋医の増加に伴う洋薬の消費、②政府の殖産興業下における化学工業薬品の製造・使用の増加である。これらは本邦の医療構造の変化および化学工業の発展を促すことになった。道修町において、これらを背景にして医薬・化学品関連商社に転じたものとしてはイヌイ株式会社(1855年創業)およびコニシ株式会社(1870年創業)等が、また医療・理科学機器扱いに転じたものとしては白井松器械株式会社(1716年創業)および山口医療器株式会社(1854年創業)等が知られる。今回演者らは道修町起源のこれらを薬種業者から医薬・化学品関連商社および医療・理科学機器扱いメーカー・商社への転換のモデルであると考え、薬種業との関わりを検討することとした。

【文献】1)宮崎 啓一、宮本 義夫、三島 佑一、“大阪道修町における試薬業界の変遷(2) —薬種業から試薬業へ—”、日本薬学会2010年会(岡山)講演要旨 2)宮崎 啓一、多胡 彰郎、“香料業界の歴史の変遷(2) —大阪道修町をめぐる薬種および香料について—”、日本薬史学会2010年会(東京)講演要旨